東洋大 往路2連覇

家計にやさしい 富士通ゼネラル nocria X ノクリア

かなスポ ☎045-227-0170 FAX045-227-0167 E-mail: sports@kanagawa-np.co.jp

箱根駅伝

第95回東京箱根間往復大学駅伝第1日は2日、東京・大手町から神奈川県箱根町までの5区間、107・5㌔に関東の22校とオープン参加の関東学生連合を加えた23チームが参加して行われ、東洋大が5時間26分31秒で2年連続7度目の往路優勝を果たした。＝関連記事17面に

初の総合優勝を目指す東海大が1分14秒差の2位につけた。国学院大が3位と健闘。駒大が4位、法大が5位で続き、史上3校目の総合5連覇を狙う青学大は5分30秒差の6位と出遅れた。

昨年まで3大会連続総合2位の東洋大は1区で西山和弥が2年連続の区間賞を獲得。先頭と8秒差の2位で出た4区の相沢晃が区間記録を塗り替える快走でトップを奪い返し、リードを山上りの5区でも守った。

3日の復路は5区間、109・6㌔で争われる。

2年連続7度目の往路優勝を果たし、ゴールする東洋大の田中龍誠 ＝箱根町

チームの進化を示す往路2連覇だった。東洋大の酒井監督は「前回とは2、3、4区で並びが違う。違う配置で勝てたのは彼らの成長」と評価した。

1年前と同じ5人で、西山が1区トップで流れをつくったところまでは一緒。首位を守った前回とは、ここからが違った。2区で2位に下がり、3区では59秒差をつけていた青学大に逆転を許した。復路へ"貯金"が必須の東洋大を救ったのは、4区の相沢だった。

「自分で追い付いて自分で（前に）いきます」とスタート前に監督に電話で伝えた3年生。序盤で8秒差を追い付いて先頭へ。区間2位より1分半以上速い区間新記録で後続を突き放し「100点以上」と自賛した。

直前まで不安があった。昨年11月後半に左足首付近を痛め、思ったように練習できなかった。2週間ほど前には仲間に「俺は走れない。走れたとしても楽な区間を走りたい」と吐露。だが弱音をコーチに戒められ、気持ちを切り替えた。前回2区3位の主力は痛み止めを飲み、力を尽くした。

1年前は復路の序盤で36秒のリードを失い、苦汁をなめた。2位に1分14秒、青学大には5分30秒差をつけたが「セーフティーリードではない」と酒井監督。5年ぶりの総合制覇へ、手綱を緩めず東京へ戻る。

相沢 チーム救う力走 4区 区間新

全選手がベストの走り

酒井俊幸・東洋大監督の話 前回大会に続いての往路優勝、うれしく思う。（2位と）前回は36秒差だが今回は74秒差ある。1区から5区までの選手がベストの走りをしてくれた。（復路は）6区、7区で主導権を取れるようにしたい。

箱根駅伝往路の経過

1区（21.3㌔） 東洋大の西山が2年連続の1位。中大が1秒差の2位、総合5連覇を目指す青学大が6秒差の3位で続いた。東海大は8秒差の6位

2区（23.1㌔） 国士舘大のビンセントが9位から1位に浮上。東洋大が6秒差の2位、中大が3位で続いた。青学大は1分5秒差の8位に後退

3区（21.4㌔） 青学大の森田が区間記録を塗り替える快走で8位からトップに立った。東洋大が8秒差の2位。56秒差の3位に駒大、4位に東海大

4区（20.9㌔） 東洋大の相沢が区間記録を塗り替えトップを奪い返した。東海大が2分48秒差の2位に上がり青学大は3分30秒差の3位に後退

5区（20.8㌔） 東洋大は田中が首位を守り往路優勝。東海大が1分14秒差の2位。国学院大が3位に入り青学大は6位に後退

青学大 6位
王者 快挙厳しく
監督 大誤算に意気消沈

往路6位でゴールする青学大の竹石尚人

快挙への道は険しくなった。総合5連覇と大学駅伝3冠に挑む青学大は4、5区で失速。首位に5分30秒の大差をつけられた。復路も実力者をそろえているとはいえ「厳しいな…。簡単に返せるタイムじゃない」。いつもは明るい青学大の原監督が意気消沈した。

トップと1分5秒差の8位で臨んだ3区の森田が区間記録を更新。左脚の不安で出場も危ぶまれた主将が一気に首位を奪い、そのまま優勝に突き進むかと思われた。だが、4区の岩見が大誤算。三大駅伝初出場の2年生は東洋大に序盤にかわされ、東海大にも逆転を許した。原監督も「何があったのかな」と首をかしげる走りだった。

1年前は脚がつりながらも5区5位と好走した竹石も、同13位と低調。期待を裏切り「動きも良くなかったし、脚もすぐ張った。実力不足」と言葉を絞り出した。

往路5位以下からの総合優勝は過去94大会で2度。1986年の順大は5位から6分32秒差をひっくり返した。「歴史に残る大逆転をするしかない」。原監督は自らを奮い立たせるような口ぶりだった。

【青学大区間記録】

区	選手名	学年	記録	区間	総合
1区	橋詰 大慧	④	1時間2分41秒	③	③
2区	梶谷 瑠哉	④	1時間8分30秒	⑩	⑧
3区	森田 歩希	④	1時間1分26秒＝区間新	①	①
4区	岩見 秀哉	②	1時間4分32秒	⑮	③
5区	竹石 尚人	③	1時間14分52秒	⑬	⑥

往路3位でゴールする国学院大の浦野雄平

浦野奮闘、過去最高3位

国学院大 ○…国学院大は往路で過去最高の3位に入った。立役者は5区の浦野。トップと4分42秒差の6位で走り始めると、山上りでぐんぐん前との距離を縮め、順位を三つ上げた。最終的に先頭まで2分44秒差に迫り、区間賞を獲得。昨年は1区2位で、今年は2区を希望していた3年生は「（山上りの）対策は特にしていなかった」と笑った。

総合順位は10位がこれまでの最高。前田監督は山下りの6区を復路の鍵に挙げ「気を抜くとやられてしまう。6区がしっかり流れれば、堅実な駅伝ができると想定している」と表情を引き締めた。

駒大 4位

教え子抜かさないと

駒大 ○…前回総合12位の駒大が往路で4位と好位置につけた。当日メンバー変更された5区の伊東が区間5位と奮闘し、大八木監督は「不安はあったが、よく走った」と目を細めた。

前を行くのは駒大OBの前田監督が率いる国学院大。大八木監督は「教え子に往路でやられたから巻き返したい。国学院は抜かさないと」と気合を入れた。

【駒大区間記録】

区	選手名	学年	記録	区間	総合
1区	片西 景	④	1時間2分44秒	⑦	⑦
2区	山下 一貴	③	1時間8分9秒	⑨	⑦
3区	中村 大聖	③	1時間2分40秒	⑤	③
4区	加藤 淳	②	1時間4分3秒	⑪	④
5区	伊東 颯汰	②	1時間12分23秒	⑤	④

経験不足 16位に沈む

日体大 ○…前回の総合4位で4年連続のシード権獲得を狙う日体大は16位でゴール。個人でも全区間2桁順位に終わり、浮上の糸口を見いだせなかった。

往路は2、3年生主体で構成。前回を経験した4人が残ったものの、ほとんどが大学三大駅伝を未経験なのが不安要素だった。昨年9月に就任した小林史明監督はレース後、OBらを前に「思ったような結果ではなかったが、これが駅伝。日体大は粘り強いのがカラー。復路はシード権が取れるよう、諦めず粘りたい」と声を絞り出した。

神大 18位
序盤に流れつくれず

18位でゴールして顔をゆがめる神奈川大のアンカー小笠原 ＝箱根町（立石 祐志写す）

2年ぶりのシード権獲得に黄信号がともった。往路18位に沈んだ神奈川大・大後栄治監督(54)は、「いつも通り走ってくれればよかった。高望みはしていなかったんだけど…」と肩を落とした。

頼みのダブルエースが流れをつくれない。4年連続の箱根路となった1区山藤が15位と振るわず、花の2区を担った越川も順位を守るのが精いっぱい。「誰よりも走って区間賞を狙う」と闘志を燃やしていた2人が力を出し切れなかった。

主将山藤は158㌢、46㌔の小さな体で先頭集団に食らい付くも、15㌔過ぎでペースを上げたのが「早かった」と指揮官。多摩川に架かる勝負どころの六郷橋でブレーキがかかった。2年前に区間5位、前回は同6位と好成績を残していただけに、不完全燃焼の感は否めない。

「想定通りにいかない」（大後監督）アクシデントも響いた。経験豊富な枝村が4区中盤で腹痛を訴えて後退。初舞台で5区を任された2年生小笠原も気負ったのか、神大にとって2年連続となる区間最下位に終わり、山上り対策という課題を突き付けられた。

10位の中央学院大とは6分9秒差。「一つでも順位を上げられるようにするしかない」と大後監督は復路へ切り替える。藤沢翔陵高出身のアンカー佐久間らの活躍でどこまで巻き返せるか。プラウドブルーに立ち止まっている時間はない。（倉住 亮多）

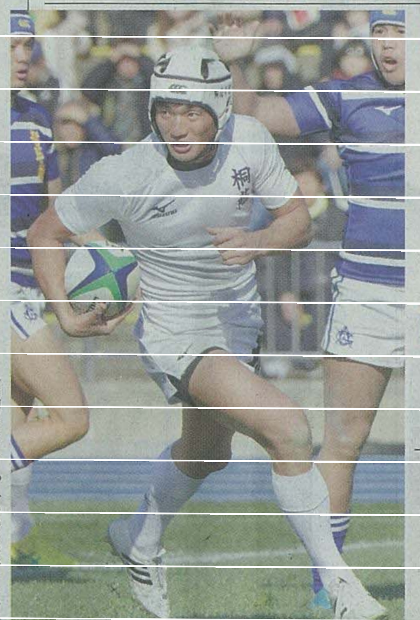
【神奈川大区間記録】

区	選手名	学年	記録	区間	総合
1区	山藤 篤司	④	1時間3分22秒	⑮	⑮
2区	越川 堅太	③	1時間9分19秒	⑮	⑮
3区	井手 孝一	②	1時間3分29秒	⑨	⑭
4区	枝村 高輔	④	1時間5分34秒	㉑	⑰
5区	小笠原峰士	②	1時間17分57秒	㉒	⑱

桐蔭 ベスト8

ラグビー 全国高校大会

劣勢立て直し逆転



前橋育英など3回戦へ進出

全国高校サッカー

往路成績

①東洋大（西山、山本、吉川、相沢、田中） 5時間26分31秒＝往路新
②東海大 5時間27分45秒
③国学院大 5時間29分15秒
④駒大 5時間29分59秒
⑤法大 5時間31分36秒
⑥青学大 5時間32分1秒
⑦順大 5時間32分5秒
⑧拓大 5時間32分8秒
⑨帝京大 5時間33分30秒
⑩中央学院大 5時間33分32秒
⑪明大 5時間34分14秒
⑫中大 5時間35分26秒
⑬日大 5時間35分37秒
⑭国士舘大 5時間35分53秒
⑮早大 5時間36分6秒
⑯日体大 5時間36分33秒
⑰東京国際大 5時間37分15秒
⑱神奈川大 5時間39分41秒
⑲城西大 5時間40分10秒
⑳上武大 5時間42分26秒
㉑大東大 5時間43分7秒
㉒山梨学院大 5時間44分16秒
関東学生連合 5時間44分17秒
（東洋大は2年連続7度目の往路優勝。関東学生連合はオープン参加のため順位なし）

【経過】東洋大が終始上位でたすきをつなぐ安定したレース運びを見せた。1区の西山は2年連続の区間賞。一度は首位を譲ったが4区の序盤で相沢がトップを奪い返し、区間記録を更新する走りで後続を突き放した。

東海大は4区館沢、5区西田がともに区間2位と好走し、1分14秒差につけた。国学院大は5区で浦野が区間記録を塗り替え6位から3位に浮上。青学大は3区で森田が区間新記録の力走で首位を奪ったものの、4区岩見が区間15位、5区竹石が同13位と失速した。

【区間1位記録】

▽1区（21.3㌔） 西山和弥（東洋大） 1時間2分35秒
▽2区（23.1㌔） パトリック・マゼンゲワンブィ（日大） 1時間6分18秒
▽3区（21.4㌔） 森田歩希（青学大） 1時間1分26秒＝区間新
▽4区（20.9㌔） 相沢晃（東洋大） 1時間0分54秒＝区間新
▽5区（20.8㌔） 浦野雄平（国学院大） 1時間10分54秒＝区間新

5区の西田（右）にたすきをつなぐ東海大・館沢 ＝小田原中継所

「距離の壁」破り快走

4区・館沢 区間2位

日本選手権1500㍍2連覇の逸材は「スペシャリスト」の肩書に満足しない。東海大・館沢が4区で区間2位。20㌔超の土俵で「距離の壁」を破って駒大、青学大を追い抜く快走にも「距離が長すぎます。もう1500（㍍）に切り替えたい」とひょうきんに笑った。

「前半からガンガン飛ばしたかった」。レース前の前のめりなプランはいきなり頓挫する。練習メニューを駅伝仕様に切り替えたのは昨年9月。距離の差が影響し「脚が思うように動かなかった」という。

ただ、箱根路はこれで3度目。歩を刻むたび、さびを落とすようにペースを上げた。4位でたすきを受け、17秒差あった駒大を序盤で置き去りに。アップダウンの激しい終盤に「余力があって気持ち良く脚を動かせた」と青学大をとらえ、残り2㌔でついに追い越す。「1500㍍を走り込んだおかげでスパートの加速はレベルアップした」。距離の違いさえ味方にするのだから末恐ろしい。

冒頭のせりふはジョークではない。2年連続の区間2位を記録した3年生はレースを終え、今後は1500㍍に絞る決断を下した。「次は今秋の世界陸上を目指す。駅伝に区切りを付けて、覚悟を持って臨まないと」。鋭いまなざしには来夏の東京五輪が映る。

ただ、可能性はギリギリまで模索する。「世界陸上に出たら駅伝はきっともう終わり。出られなければ夏から駅伝に取り組める。そうなれば一気に切り替えます」。迷わず、欲を張り、そして結果を残す。だから館沢は陸上界で輝き続ける。（清水 嘉寛、写真も）

東海大 2位
スピード軍団 本領
総合初優勝へ弾み

5時間27分45秒の2位でゴールし、雄たけびを上げる東海大のアンカー西田＝箱根町（立石 祐志写す）

「湘南の暴れん坊」の異名を取るスピード軍団がついに本領発揮だ。東海大は往路2位でゴールし、初の総合優勝へ弾みをつけた。

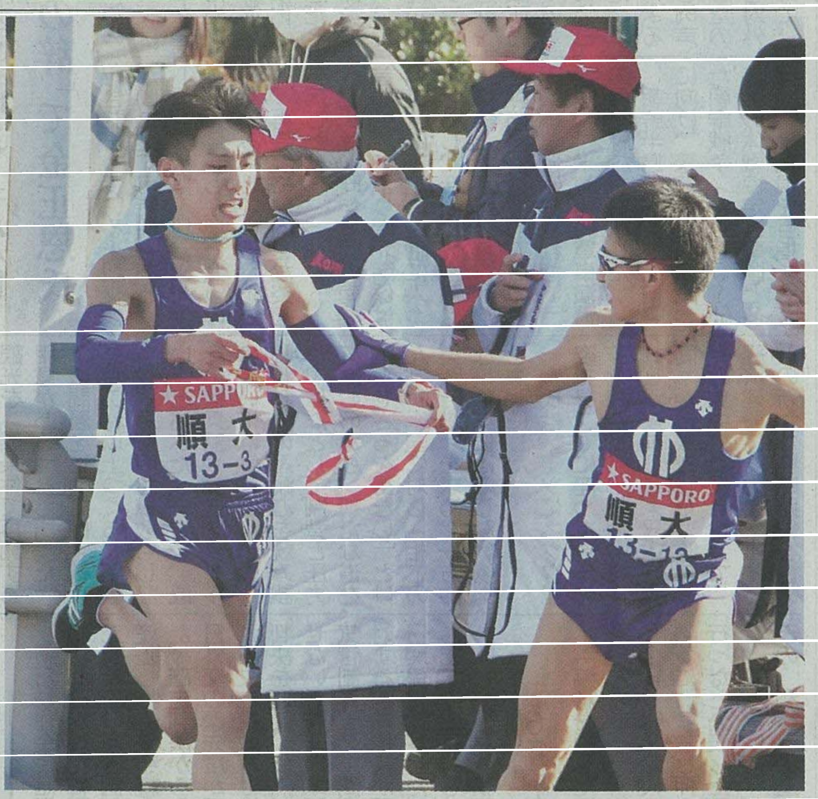
昨年11月の全日本で準優勝した実力通りに、1区鬼塚から上位争いを演じた。じわじわと順位を上げると、躍進の立役者は4区館沢と5区西田だ。4位でたすきを受けた館沢が2人を抜き、トップの東洋大と2分48秒差でつなぐ。

初出場で山上りを託された2年生は「館沢さんがラストでもう一回、追い上げてくれた。あとは自分が差を縮めるだけ」と前半から突っ込み、標高差約860㍍の「天下の険」を「ランニングハイ状態だった」と攻めに攻めた。区間2位ながら5区の新記録もマークした。

館沢に鬼塚、阪口、関ら全国高校駅伝で花の1区を任されたエース級がそろう現3年の「黄金世代」。前大会も前評判は高かったものの、トラックにも力を入れるスピードランナーたちは距離の長い箱根路で満足な結果を得られなかった。

そこで、今季は例年以上に走り込み、昨年11月の1万㍍記録会も回避して合宿に充てた。両角速監督(52)が「ボリュームのある距離をしっかり踏むために目先を変えてきた。その成果が箱根駅伝でどう出るか」と期待を持って送り出し、選手は往路記録を上回る好タイムで応えた。

首位の東洋大を1分14秒差で追い、5連覇を狙う青学大には4分以上の差をつけた。「うちは復路も強い」と胸を張った西田。悲願へ勝負の後半戦を迎える。（織田 匠）



3区で順位を一つ上げてたすきをつなぐ順大・橋本（左）＝平塚中継所

体幹鍛え終盤粘り

順大 7位 3区・橋本

絶対的エースたるものは何かを思い知らされた。戸塚中継所で待つ順大3区・橋本の眼前に、日本人歴代最高記録で10人を抜いた塩尻が飛び込んで来る。念願のたすきリレーで背中をたたかれて激励を受けると、順位を一つ上げる「最低限の走り」で後続に託した。

勝負どころと読んだ終盤。法政二高出身の3年生は前を走る東京国際大・真船に最後まで食らいついた。「前半に張り切りすぎた。これまでならこういう場面で離されていた。力は付いてきた」と笑顔で振り返った。

どん底からはい上がった。昨夏に右大腿骨を疲労骨折し、本格的な練習を再開したのは9月下旬になってから。後半にフォームがぶれる課題を克服するため体幹トレーニングに励み、11月の1万㍍記録会で自己ベストをマークした。青学大などライバル校の練習メニューを研究するなど、上級生の自覚もにじむ。

タイムは昨年と同じ1時間3分44秒。満足などしていない。「塩尻さんはどんな順位でも自分の分の走りで流れを引き寄せられる。そんな強い選手になりたい。自分の力はこんなもんじゃない」。度胸と粘りで順大エースの系譜に名を刻む。（松村 祐介、写真も）

関東学生連合

鈴木大「自分らしく」

創価大 ○…藤沢翔陵高出身で創価大の鈴木大が関東学生連合の一員として箱根デビュー。慣れ親しんだ3区を志願し、地元の応援を力に走った。

関東学生連合チームとして3区を力走した創価大・鈴木

中大 12位

帝京大10連覇ならず 天理大に敗れる

全国大学ラグビー

日テレ連覇

皇后杯サッカー

アジア杯向けUAEに出発

プレス工業 目標届かず 28位

苦戦も若手成長

旭化成V3

3年連続24度目の優勝を果たし、胴上げされる旭化成のアンカー・大六野秀畝 ＝群馬県庁前